

文化

▼天神さまの細道
別の本を探していったのだけれど、手にしたのは、岩波文庫の『わらべうた』(町田嘉章・浅田健一編)だつた。「通りやんせ」の歌が載つてゐる。「通りやんせ 通りやんせ」此は何處の細道じやちいつと通して下しやんせ……。解説には、「天神様(参り)」ともいい、江戸時代から殆どどんせんばする者この指たかれど全国に普及した遊戯歌、ある前の一頁を繰ると、「梅か桜かへくれんぼ」「奈良」の歌。隠山くずせ ジャンケンポンに続けて、「梅か桜か ギッヂヨン」と歌つたよつて、大和の長谷寺が出てくる。懐かしさついでに、当地(奈良市)の天神さんがあたりを歩いてみた。私事だが、この天神社は筆者の氏神さんにある。

▼天神社と瑜伽神社
江戸期の地誌『奈良坊目拙解』(村井古道)によると、天満天神宮一座、当町(北天満町)の東岳に在り、大乘院御門跡支配で神主吐山氏とあり、また嘉吉元年(一四四二)に天満猿樂があつたことが記されている。拝殿の前に祭神菅原道真ゆかりの石造の牛がゆつたり座つていて、境内の石碑に「草小路町」と懷かし

いわが町の名もあつた。天神さまの細道の坂を西へ下る所である。長い石段を登つた脇に飛鳥の御井(みい)と、ふくらむとのこゝろへ行つて、火鉢に万葉の歌碑が立つ。この歌には大伴坂上郎女の元興寺の里を詠じて、『普及した遊戯歌、ある前の一頁を繰ると、「梅か桜かへくれんぼ」「奈良」の歌。隠山くずせ ジャンケンポンに続けて、「梅か桜か ギッヂヨン」と歌つたよつて、大和の長谷寺が出てくる。懐かしさついでに、当地(奈良市)の天神さんがあたりを歩いてみた。私事だが、この天神社は筆者の氏神さんにある。

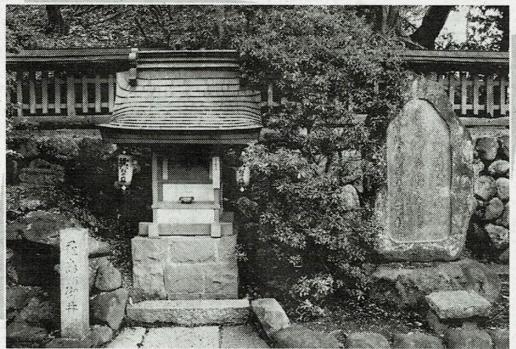
▼天神社と瑜伽神社
江戸期の地誌『奈良坊目拙解』(村井古道)によると、天満天神宮一座、当町(北天満町)の東岳に在り、大乘院御門跡支配で神主吐山氏とあり、また嘉吉元年(一四四二)に天満猿樂があつたことが記されている。拝殿の前に祭神菅原道真ゆかりの石造の牛がゆつたり座つていて、境内の石碑に「草小路町」と懷かし

民俗通信

292 西村 博美

貴族の怨霊さざめく

奈良の飛鳥と御靈信仰



瑜伽神社境内の大伴坂上郎女の歌碑(右)と
「飛鳥の御井」=撮影・安田勝四郎

めの歌一首の題詞がある。
折口信夫は、「昔住んでいた飛鳥は、勿論よい所だが、奈良の飛鳥も、なかなか見るために、愉快な処だ」と訳しているが、郎女(い

らうめ)自身の気持ちは、本当に「愉快」ばかりであつたるうか(『口訣万葉集(上)』)。大伴氏の本拠は、彼女が「古郷(ふるさと)」と述べ、もとの「飛鳥」であつたのだから。遷都があつて後、神社があるこの丘陵一帯を「平城(なら)の飛鳥山」との名で呼ばれるようになつたといふ。

▼奈良の飛鳥
瑜伽神社に続く山の頂間に、森敷が住んでいたことがある。「山は小さく低かつたが、高く大きな松林におおわれ、……大和三

山といわれる、三つの肩を引いたような耳成山、畝傍山、天香具山

は、本元興寺とともに呼ばれるようになつた。また、前掲の『奈良坊目拙解』

の元興寺町の項に、「飛鳥川。当町南の門限にあつて、奈良飛鳥川と云ふ。この小川の源

つけた。「学校は極楽院にありま

った。庭で、ぽんちいさんや、ま

ま」とをして遊びました。そのこ

地内町川上町を過ぎて当町にきて、白山辻子鳴川に出る」。

また、「草(艸)小路町。当町東方人家なく野外とある。外檣木戸門あつて小川

八所大神)や他にも僧・玄昉(げんぼう)の伝承や吉備塚、俊寛塚

の遺跡が残る。

この地に限つたことではない

るが、よく雪が降り下駄ばかりだったのです。寒いときは、みはるかす、すばらしい眺望を持っていたので、森は書いている『わ

らは、『ならまち』の名に呼ばれる旧神社がある。長い石段を登つた脇に飛鳥の御井(みい)と、ふくらむとのこゝろへ行つて、火鉢に万葉の歌碑が立つ。この歌には

大伴坂上郎女の元興寺の里を詠じて、『普及した遊戯歌、ある前の一頁を繰ると、「梅か桜かへくれんぼ」「奈良」の歌。隠山くずせ ジャンケンポンに続けて、「梅か桜か ギッヂヨン」と歌つたよつて、大和の長谷寺が出てくる。懐かしさついでに、当地(奈良市)の天神さんがあたりを歩いてみた。私事だが、この天神社は筆者の氏神さんにある。

が青春わが放浪』)。神社を南へ少し行つたところに、飛鳥小学校がある。明治六年に万葉の歌碑が立つ。この歌には

が青春わが放浪』)。神社を南へ少し行つたところに、飛鳥小学校がある。明治六年に万葉の歌碑が立つ。この歌には

が青春わが放浪』)。神社を南へ少し行つたところに、飛鳥小学校がある。明治六年に万葉の歌碑が立つ。この歌には

養老(年七一八)、「飛鳥四大寺の二」と言われた「法隆寺を新京(平城京)に移遷した」と「続日本紀」の記事にある。一方、前身の法興寺(飛鳥寺)は、元興寺創建以降

は、本元興寺とも

呼ばれるようになつた。また、前掲の『奈良坊目拙解』

の元興寺町の項に、「飛鳥川。当町南の門限にあつて、奈良飛鳥川と云ふ。この小川の源

つけた。「学校は極楽院にありまして、ぼんちいさんや、まことにをして遊びました。そのこ

地内町川上町を過ぎて当町にきて、白山辻子鳴川に出る」。

また、「草(艸)小路町。当町東方人家なく野外とある。外檣木戸門あつて小川

八所大神)や他にも僧・玄昉(げんぼう)の伝承や吉備塚、俊寛塚

の遺跡が残る。

みなに、先述の天神社を始め、崇道(すどう)天皇社(早良・さわら・親王)・不空院御靈塚(井上・内親王・他戸・おさば)・親王ら

・八所大神)や他にも僧・玄昉(げんぼう)の伝承や吉備塚、俊寛塚

などの遺跡が残る。

うが、元興寺や紀寺など、いまは「ならまち」の名に呼ばれる旧神社がある。長い石段を登つた脇に飛鳥の御井(みい)と、ふくらむとのこゝろへ行つて、火鉢に万葉の歌碑が立つ。この歌には

が青春わが放浪』)。神社を南へ少し行つたところに、飛鳥小学校がある。明治六年に万葉の歌碑が立つ。この歌には

が青春わが放浪』)。神社を南へ少し行つたところに、飛鳥小学校がある。明治六年に万葉の歌碑が立つ。この歌には